

南風

南照寺 寺報 第五号 平成二十五年 夏

残暑の候、非常に厳しいところがあります。

はじめにお伝えしたいのですが、お盆前後にお墓参りで南照寺にお運びいただいた方々のうち、住職や坊守の不在を残念に思っておられる方が少なくないとの声があつて、もし肩すかしを食らわされたように感じさせてしまったのであれば、申し訳ないことでありました。私の方もいろいろ考えた上での決定でしたので、判断ミスであれば、お許しを請うしかありません。まだしばらく娑婆の縁尽きることなければ、きつとお会いできる機会もあるかと思ひますので、この度はどうかお目こぼしいただきたく存じます。

いつも通り、前の会合の報告から書き出すことにいたします。先ず正信偈のお勤めですが、今回は恥を忍んで二人の息子も同席させての勤行でした。予想通り下の五歳の子は、終りの方は根が尽きて寝転がってしまったて、態度最悪の状態でしたが、とにかく最後までその場にいたことだけは評価できるかと。上は小さいころから愛想のない子でしたが、九歳も終わろうかという今も相変わらずブスツとしたままなので、こちらが冷や冷やします。どうも先天的に持っている人間の性分というのは、後天的な教育などによつてはとも変え得るものでないでしょう。それにしてもなんでこう、私自身のろくでもない「部分」が、彼らの行動を通して露見しつづけねばならないのか。……結局私自身がそこに現れ出ているだけであつて、どこへも文句を言いに行けない所為であります。そのうちこの子らも多少こなれてくることを期待して、もうしばらくご勘弁いただけたら、と念じております。

お寺に寄せられた、いろいろな対応についての意見を拝聴いたしました。お盆については、先述の通りです。そのほかに、

・三カ月に一回ぐらいは門徒総会を開いて、相互に横のつながりを密にすべきではないか。その上で今後の

南照寺について、建設的な意見を出しあえるようにすべきだと思う。

・お墓参りの多い、日曜日や土曜日の午前中にお寺にいておいてもらいたい。毎週でなくても、特定の日もかまわない。

・第三土曜日午後二時からの、この会のごがほとんど知れ渡っていない。別紙をもって、広く知らしむべきである。

・新役員の公示が載せてある、「南風」第三号の存在を知らない人が多い。勿論四号についても然り。単にお寺の玄関に置いておくだけでは、お墓参りに来た人でさらに挨拶に立ち寄った人だけがかるうじて手にするだけである。全門徒に郵送するなどして、普及させねば意味がない。

などなど。他にも、不行き届きな点、改善が見られない点等、ご指摘いただきました。

そのあと、(この場で私が書くのが適当かはわからないのですが、)これまでずっと南照寺で住職不在の間を守つていただいていた倉島さんが、この十一月をもつて東京へお帰りになる、ということが、話の中心になりました。ご存知の方も、またなにも知らなかつた方もあろうかとは思いますが、いずれにしても大変なことでありますので、とにかくここは早急に御門の方皆さまに集まつていただく機会を設けて、善後の取り決めになすべきである、とのことで意見がまとまりました。

十月五日、土曜日 午後二時 於南照寺本堂

門徒総会開催

これについては、役員の方がハガキに文面作成なされましたものを、既に送付済みかと思ひます。ただそのことが協議されたのもつまり、この第三土曜日の会合の上であつたということです。

報恩講はやはり先月決めた通り、十月十九日の第三土曜日に勤まることとなります。そしてその一週間前ぐらいに、仏具を磨いたり、本堂の掃除をしたりする「お磨き」をしようと思っっています。ただこの前の会合では時間が足りなくて、きちんとは決められませんでした。次回また、直前ではありませんが、どうするか話し合ってみようと思っております。

お盆の八月一五日は、六十八回目の終戦記念日でした。上の子が僕に尋ねます。

「お父さんの子供の頃って、まだ戦争あったん？」

戦後二十年目に生まれた私は、勿論「戦争を知らない子供たち」の一人です。第二次世界大戦と言えば、はるか昔の歴史の一コマのように考えていましたが、あらためて子供の頃の記憶をたどれば、まだそこかしこに「戦争」が散らばっていたように思います。

母方の実家近くに幼稚園まで住んでいたこともあって、尼崎商店街は、幼い頃の思い出の場所です。場末のラーメン屋や、ウスターソースのかかったカレーなんかとともに、白い服で戦闘帽をかぶった「傷痍軍人」の、ラッパや鉦、手回しオルガンを鳴らしている姿がくつきり記憶に焼き付いています。イザリ車や松葉杖、千切れた手足に巻きつけられた包帯、けっこうな大音量、小さかった私にはただただ恐ろしいばかりでしたが、手を引いていた母は必ず、自ら或いは私より四つ上の兄に託して小銭を置いて行きました。

「おじいちゃん、いつもお金、置いてたんよ。」

三歳の時に死んだ祖父は、「日華事変」に応召した海軍の下士官でした。肋膜炎で病院へ運ばれて数日後、艦は轟沈、生還者は三人ほどだったといえます。そのまま内地へ送還、大阪大空襲の頃は予備役だったのか家にいたようです。終戦後すぐ、惜しげもなく軍刀を三つに折って包丁にした、とか。

当時母は国民学校の二年生で、五人兄弟の一番上でした。夜毎の空襲警報で起こされ、眠くてたまらないので、一つ下の妹と布団をかぶって防空壕まで走っていったら、「グラマンに狙い撃ちやぞっ」と近所の親父にどやしつけられたことや、屋根に刺さった焼夷弾の

筒を、大人たちがみんなではたき落した話、真っ黒の焼死体がゴロゴロしているところを横切って行っても、不思議に怖くなかったことなんかを、時々してくれました。最後にはだいたい食べ物の話になって、好き嫌いが多くせに大食だった私を見て一言、

「あんたらには、わかれへんわ。」

遠い眼で言った母のその言葉は、戦中と戦後に横たわる底なしの断絶を、正しく表現したものでした。三号に書いたことと重なるのですが、その頃の大人は窮屈そうに見えたものでした。身体の中に大きな矛盾を抱えながら、当時の誰もが生きていたのだと気がついたのは、ずっと後になってからのことです。終戦の日を境に、あらゆるものの価値が逆転、鬼畜米英からギブ・ミー・チョコレートへ、「ぜいたくは敵だ」から大量消費社会へ、八紘一宇から個人主義へ……戦地では、公正無私で正直で、責任感が強く勇敢な人間から順々に、死んでいったのではなかったか……そう考えて生き残った人々の問いと苦悩は、いかばかりだったでしょう。当時、書店では『レイテ戦記』や『戦艦大和の最後』、『一下級将校の見た帝国陸軍』といった類の本が、『のらくろ』の復刻盤や軍歌集などとともに、かなりの一角を占有していました。大人たちは自分たちの戦争体験を、全然消化できていなかったのです。

私は、わからないと言われた、実は大人たちにもわかっていない「それ」をわかりたかった。そうリアルに思える、最後の世代であると自負しています。戦争を知らない子供の子供である私の妻ではもう、そんなギャップに対する焦燥感などまるで理解できません。だから私が「それ」を子供らに伝えていくしかないのです。わがらうと欲し続けることだけが、優れて地獄への門の「門」となり得るでしょうから。

次回の「お勤め」の会は、同様に

九月二十一日(土)午後二時より 於南照寺本堂

です。その次の十月十九日(土)は報恩講として正信偈の真四句目下げが勤まります。